



アウシュヴィッツ平和博物館

## パネル展示

# いのちと平和の尊さを心に刻もう

アウシュヴィッツ平和博物館

アウシュヴィッツ平和博物館は、2003年、「みちのくの玄関口」福島県白河市に開館し、今年で5年目を迎えました。

緑の牧草地に江戸時代の古民家を移築し、「アウシュヴィッツの記録」を中心に、杉原千畝やコルベ神父の人道的行為を紹介。200人余のボランティアが建設に参加した「市民の手づくりの博物館」です。

屋外には、JR東労組の皆さんが1週間ひとり10円カンパで購入し、寄贈くださった「貨車」を配置。

収容所へ貨車で移送された人々を思い、悼む「平和のモニュメント」で、内部は展示室になっていて、現在は、ポーランドの子どもたちが戦争中の日常を描いた「子どもの目に映った戦争」絵画展を行っています。

今年、アンネフランクの展示棟も完成。外壁を飾る3000枚のレンガは、来館者や支援者のレンガ募金で購入したもので、ボランティアの手で1枚ずつ丁寧に貼られました。



10円カンパの貨車

\*



収容所の正門。ドイツ語で Arbeit Macht Frei (働けば自由になる) と表示されている。

アウシュヴィッツ平和博物館は、1988年から日本全国を巡回した「心に刻むアウシュヴィッツ展」の結実として誕生しました。今から30年近く前、後に初代館長となった青木進々氏はアウシュヴィッツを初めて訪れ、大きな衝撃を受けました。「これは、日本の問題をあぶり出す鏡。平和を築くための格好の教材になる」と思い立ち、収容所跡を保存するポーランド国立アウシュヴィッツ博物館から犠牲者の遺品や関係資料を借り受けました。

「多くの日本人にアウシュヴィッツの事実を知らせること」というポーランド側の条件を満たすべく、全国巡回展を実施。開催地毎にボランティアの実行委員会が組織され、市民参加型の展示会は110カ所、延べ90万人の来場者を記録しました。

2000年には栃木県に展示館がオープンしましたが、1年半後に、立ち退かざるを得なくなりました。

すぐに、ボランティアによる「アウシュヴィッツ平和博物館を存続させる会」が発足、代替地探しと募金活動が始まり、2003年4月、全国の支援者、平和愛好者の協力により、アウシュヴィッツ平和博物館は不死鳥のように甦りました。

この間、リードオフマンの青木さんが末期ガンのため逝きましたが、その遺志を受け継いだ小淵真理新館長の下、スタッフ、ボランティアが協力して館を運営。知名度も徐々に上がり、来館者も増加。「いのち」をテーマとした中学校の総合学習にも利用されています。今、憲法9条を改定し、再び日本人が戦争に巻き込まれる事態が進められています。

「過去に学ばない者は未来においても盲目になる」というワイツゼッカー元西独大統領の言葉が思い起こされます。ぜひ、アウシュヴィッツ平和博物館へお越しください。

あの惨禍を、二度と、繰り返させないために、学び、考え、発言しましょう。「いのちと平和の尊さ」を心に刻みながら。